

5) 先天性胆道拡張症の母子発生例

内藤 真一・岩渕 眞
大沢 義弘・内山 昌則 (新潟大学附属病院)
広田 雅行・広川 恵子 (小児外科)
近藤 公男・増子 洋
斉藤 英樹・丸田 宥吉 (新潟市民病院外科)

先天性胆道拡張症(以下本症)の家族内発生は極めて稀だが、我々は母子発生例を経験したので、若干の考察を加えて報告する。

症例1は母親で、25才時に第1子を妊娠中に腹痛で発症し、精査にて本症と診断され、胆嚢外瘻造設後に分娩し、根治手術を行った。術後は順調に経過している。症例2は症例1の第3子の女子で、第1子、第2子はともに男児で健常である。2才時に腹痛で発症し、以後数回の急性膵炎症状がみられ、2才8カ月時に本症として根治手術を行ない、以後は順調に経過している。両症例ともに膵管、胆道合流異常が認められている。

6) 初回手術より12年後に遺残拡張胆管に癌の発生をみた先天性胆管拡張症の1例

霜田 光義・白崎 功
鈴木修一郎・楠渕 統一 (富山医科薬科大学)
桐山 誠一・唐木 芳昭 (第二外科)
田沢 賢次・藤巻 雅夫
阿部 要一 (木戸病院外科)
麓 耕平・東山 考一 (泊病院外科)

症例は23才女性で、11才時先天性胆管拡張症の診断にて、胆嚢、胆管部分切除、胆管空腸吻合術を受けている。その後自覚症状はまったく認めなかったが、12年後に右季肋部痛が出現しさらに急性膵炎を合併、諸検査にて膵管胆道合流異常を伴った遺残総胆管嚢胞と診断された。CEA 4.0ng/ml, CA 19-9 136U/ml と高値を認め、癌合併が疑われた。

開腹すると嚢胞は膵頭部にあり、これを切開すると腹腔に乳頭状の腫瘍を認め、術中迅速病理にて腺癌の診断を得た。膵頭十二指腸切除を行ったが、腸管膜根部リンパ節転移が著明で非治癒切除に終わった。胆道癌取扱規約に従うと、肉眼型は乳頭浸潤型で、拠部位は BiPh, 所見は Po, Ho, S₂, V₂, hinfo, panc₂, do, n₃ (+), ew₁, tub₂, INFr, ly₁, U₁, Pno であった。

胆道癌合併率の高い本症では、初回の外科的治療に際し、拡張部胆管を確実に切除することが重要であると考えられた。

7) 未熟児 PDA の5手術治験例

大谷 信一・中込 正昭 (水戸済生会)
諸 久永・土田 昌一 (総合病院)
堀米 仁志・宮本 泰行 (胸部外科)
山下 正夫 (茨城県立こども病院)

症例は在胎24週～34週(平均28週)、手術時日令20日～68日(平均48日)、手術時体重525g～1521g(平均997g)の未熟児であった。

手術に際しては保温(室温33℃～35℃)、と動脈圧、酸素モニター(TcO₂)、丁寧な用人工呼吸器等麻酔管理が重要である。手術は extrapleural thoracotomy で PDA を露出し、二重結紮を行なう。PDA は大動脈と同じ太さがあり、もろいのでちぎらないように慎重に行なう。手術用具は小型の剝離鉗子以外は特別のものは要しない。

1985年6月から1987年7月までの新生児科444入院症例中20例に PDA があり、フェナム酸投与で改善の得られなかった5例に結紮術を行ない全例治癒した。

8) Aortic Valve Endocarditis の外科治療経験

佐藤 良智・土田 昌一 (長岡赤十字病院)
林 純一・矢沢 正知 (胸部外科)
吉村 孝夫・江口 昭治 (新潟大学)
(第二外科)

近年、IE による AR が増加し、外科治療が困難な例に遭遇する機会も増えるものと考えられる。

当科で経験した5例の Aortic Valve Endocarditis を呈示し、問題点を提起する。症例は、24～71歳の男性で、2例は慢性期で心不全が良くコントロールされた時期に手術を施行し、良好な結果を得た。内科的治療に抵抗し、ひき続き手術を施行した3例中2例を失った。1例は、第3病日に大動脈からの出血死であり、他の1例は、術後 MOF で病院死した。

9) 後天性弁膜症における弁形成術をともなり二弁手術症例の検討

岡崎 裕史・入沢 敬夫 (竹田総合病院)
高橋 芳樹・岩松 正 (心臓血管外科)

連合弁膜症に対し弁置換あるいは弁形成術が行なわれている、主病変に対し弁置換が行なわれた場合、残存病変に対する処置が問題となる。我々は、AVR+僧帽弁形成術5例 MVR+TAP 10例について検討した。重病 AR 症状が遠隔期突然死をきたした他は、安定した経過

をたどった。連合弁膜症であっても可能であれば、弁形成術を積極的に施行して良いと考えられた。

10) ヘパリンコーティングチューブによる無ヘパリン化ローラポンプ使用補助循環の臨床応用

齊藤 憲・大関 一 (新潟大学)
山本 和男・岡崎 裕史 (第二外科)
横沢 忠夫・江口 昭治

開心術後の人工心肺離脱不能例や重症 LOS 症例において IABP による圧補助だけでは血行動態の改善が見られない症例がある。そういった症例に対しヘパリンコーティングチューブとローラポンプを用いたヘパリン化しない比較的簡便な補助循環を行なった。人工心肺離脱不能の5例と術後 LOS の1例の計6例に IABP 駆動下で使用した。初期の症例で補助流量が毎分 1000ml 以下の例では酸素化装置のない V-A バイパスとし、それ以外では左房脱血、大腿動脈送血による左心バイパスとした。6例中4例に長期生存を得た。全症例とも血栓塞栓症を示唆する所見はなかった。本方法は比較的簡便に行ない得る補助循環法として有用であると思われる。

11) 化学療法が著効を奏した HCG 産生縦隔腫瘍の一手術例

相馬 孝博・小熊 文昭 (新潟県立がんセンター新潟病院胸部外科)
寺島 雅範
坂田安之輔・小松原秀一 (同 泌尿器科)
渡辺 学

甲状腺機能亢進にて発見された hCG 産生縦隔腫瘍両肺転移に対し、CDDP, VP-16 を投与した結果、原発巣・転移巣ともに著明に縮小し、hCG も正常に近くなった。その後胸骨正中切開にて、腫瘍摘出・両肺転移切除を施行したが、組織学的にはいずれも壊死組織であった。全身転移が疑われる場合に、外科療法に先立ち化学療法を優先させて有効であった一例を報告する。

12) 胸部外傷治療の現況について

柴田 芳樹・大関 一 (秋田赤十字病院)
多田 哲也・八木 実 (外科)
佐藤 攻・川瀬 忠
工藤 進英・高野 征雄

秋田県交通災害センターにおける、過去2年間の胸部外傷の概要を検討した。外来受診患者12568名中入院を要した者2402名でそのうち、胸部外傷を有する者は107

例であった。平均年齢は43歳で、男女比は4:1で男に多かった。胸部外傷の原因は交通事故、転落事故が多く、損傷の内訳は肋骨骨折87例(78%)血気胸50例(45%)肺挫傷14例(13%)気管支損傷1例で心大血管損傷はなかった。合併外傷は頭頸部28例、四肢骨盤骨折等46例腹部臓器損傷9例であった。胸腔ドレナージなどによる保存的治療が殆どで、人工呼吸を要したものは2例、手術を行ったものは4例で、手術死亡はなかった。死亡は17例で、殆どが頭頸部腹部損傷合併例であった。胸部外傷は、その他の部位の外傷と合併して発生する事が多いので頭部、腹部傷害を念頭におき、その早期発見、治療に心がける事が重要である。

13) 深大腿静脈血栓症に対する動静脈吻合付バルマ手術の1例

吉野 武・吉野 利夫 (国立療養所富山病院 外科)
吉岡 勉・西能 竝 (医療法人五省会 西能病院整形外科)

65才男性で左大腿腫脹を認め、歩行時特に昇段時に左下肢痛著明となる静脈性破行を示す症例に対し左下肢静脈造影を施行した。総腸骨動脈は完全に閉塞しており、左大腿静脈内に血栓を認めた。動静脈吻合付バルマ手術の適応と考え右大伏在静脈と左大腿静脈を吻合し、さらにジャンプして左大腿動脈に吻合を加えた。4週後動静脈吻合を結紮した。術後患肢の腫脹は残るものの静脈性破行は消失し、自転車に乗ることも可能となった。ストレーンゲージプレティスモグラムにて術前、術後の腫脹程度を評価した。術前値 18ml/min/100ml tissue から術後 42ml/min/100ml tissue へと改善しており、安静時の値としては、正常値を示した。バルマ手術は効果が少ないとされている手術術式であるが、動静脈吻合を加え、さらに症例をえらべば、効果を期待出来る手術術式と考えられ報告した。

14) 孤立性内腸骨動脈瘤の3治療例

片桐 幹夫・鈴木 万里 (立川総合病院)
山本 和男・中沢 聡 (心臓血管センター)
春谷 重孝・坂下 勲

内腸骨動脈に局限した動脈瘤の3例を経験した。年齢は61才、89才、78才で、うち2例は破裂性であった。手術は、大動脈外腸骨動脈バイパスないしは大動脈大腿動脈バイパス、および瘤の流入部と流出口の閉鎖を施行した。いずれも良好に経過し退院した。